


# 第 1 章

## 線形写像の像と核



### 線形写像とベクトルの線型独立性

 線形写像と線形独立性  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  を線形写像、  
 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n \in \mathbb{R}^n$  とする  
ベクトル  $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$  の  $f$  による像

$$f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)$$

が線型独立であるとき、 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$  も線型独立である

ref: 行列と行列式の基礎 p65~66

ref: 図で整理! 例題で  
納得! 線形空間入門 p71  
~73

#### 証明

$\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$  の線形結合

$$c_1 \mathbf{v}_1 + c_2 \mathbf{v}_2 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

を考える

この両辺を  $f$  で写すと、 $f$  の線形性と零ベクトルの像  $f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$

を使って

$$c_1 f(\mathbf{v}_1) + c_2 f(\mathbf{v}_2) + \cdots + c_n f(\mathbf{v}_n) = f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$$

仮定より  $f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)$  は線型独立なので、 $c_1 = c_2 = \cdots = c_n = 0$  である


よって、

$$c_1 \mathbf{v}_1 + c_2 \mathbf{v}_2 + \cdots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

を満たす  $c_1, c_2, \dots, c_n$  は 0 しかないので、 $\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n\}$  は線型独立である ■



次の定理は、平行なベクトルを線型写像で写した結果、平行でなくなったりはしないということを述べている

 線形写像と線形従属性  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  を線形写像、 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n \in \mathbb{R}^n$  とする  
 $\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$  が線形従属ならば、 $\{f(\mathbf{v}_1), \dots, f(\mathbf{v}_n)\}$  は線形従属である

#### 証明

$\{\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_n\}$  が線形従属であるとは、少なくとも 1 つは 0 でないある定数  $k_1, k_2, \dots, k_n$  が存在して

$$k_1 \mathbf{v}_1 + k_2 \mathbf{v}_2 + \cdots + k_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

が成り立つことを意味する


この両辺を  $f$  で写すと、線形性より

$$k_1 f(\mathbf{v}_1) + k_2 f(\mathbf{v}_2) + \cdots + k_n f(\mathbf{v}_n) = f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$$

が成り立つ

よって、 $\{f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)\}$  も線形従属である ■

たとえば平行四辺形の像が線分や 1 点になったりしないことなどは、  
「 $\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n\}$  が線型独立ならば、 $\{f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)\}$   
も線型独立である」と表現できる

 単射な線型写像は線型独立性を保つ 線型写像  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  が単射であるとき、 $\{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n\}$  が線型独立ならば、 $\{f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)\}$  も線型独立である

#### 証明

$f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)$  の線形結合

$$c_1 f(\mathbf{v}_1) + c_2 f(\mathbf{v}_2) + \dots + c_n f(\mathbf{v}_n) = \mathbf{0}$$

を考える

$f$  の線形性と零ベクトルの像  $f(\mathbf{0}) = \mathbf{0}$  より、次のように書き換えられる

$$f(c_1 \mathbf{v}_1 + c_2 \mathbf{v}_2 + \dots + c_n \mathbf{v}_n) = \mathbf{0} = f(\mathbf{0})$$

$f$  は単射だから、上式より

$$c_1 \mathbf{v}_1 + c_2 \mathbf{v}_2 + \dots + c_n \mathbf{v}_n = \mathbf{0}$$

が成り立つ

ここで、 $\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n$  は線型独立なので、 $c_1 = c_2 = \dots = c_n = 0$  である

よって、 $f(\mathbf{v}_1), f(\mathbf{v}_2), \dots, f(\mathbf{v}_n)$  は線型独立である 

零写像と射影を除けば、 $f$  によってベクトルが「つぶれない」という性質

は、次のように表せる


$$\boldsymbol{v} \neq \mathbf{0} \implies f(\boldsymbol{v}) \neq \mathbf{0}$$



[ Todo 1: ref: 行列と行列式の基礎 p55 例 2.1.15]

この条件は、実は線形写像が単射であることを意味している

対偶をとって、次のように表現できる

 零ベクトルへの写像による単射性の判定 線形写像  $f$  が単射  
であることと次は同値である

$$f(\boldsymbol{v}) = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{v} = \mathbf{0}$$

 証明

i.  $f$  が単射

ii.  $f(\boldsymbol{v}) = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{v} = \mathbf{0}$

(i)  $\implies$  (ii)

零ベクトルの像は零ベクトルであることから、 $f(\boldsymbol{v}) = \mathbf{0}$


は、

$$f(\boldsymbol{v}) = f(\mathbf{0})$$

と書き換えられる

$f$  の単射性により、この式から、

$$\boldsymbol{v} = \mathbf{0}$$

がしたがう 

(ii)  $\implies$  (i)

$f(\boldsymbol{v}_1) = f(\boldsymbol{v}_2)$  を満たす  $\boldsymbol{v}_1, \boldsymbol{v}_2 \in \mathbb{R}^n$  を考える

このとき、 $f$  の線形性から、

$$f(\boldsymbol{v}_1 - \boldsymbol{v}_2) = f(\boldsymbol{v}_1) - f(\boldsymbol{v}_2)$$

となる

仮定 (ii) より、

$$f(\boldsymbol{v}_1 - \boldsymbol{v}_2) = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{v}_1 - \boldsymbol{v}_2 = \mathbf{0}$$

がいえるので、 $\boldsymbol{v}_1 = \boldsymbol{v}_2$  が成り立つ


$f(\boldsymbol{v}_1) = f(\boldsymbol{v}_2)$  から  $\boldsymbol{v}_1 = \boldsymbol{v}_2$  が導かれたことで、 $f$  は単射であることが示された ■



## 線形写像の単射性と全射性

線形写像  $f$  の単射性を表現行列  $A$  の言葉で述べる

ref: 行列と行列式の基礎 p67~68

 線形写像の単射性と表現行列 線形写像  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  の表現行列を  $A$  とするとき、次はすべて同値

- i.  $f$  は単射
- ii.  $A\boldsymbol{x} = \mathbf{0}$  は自明な解しか持たない
- iii.  $\text{rank}(A) = n$

 証明

(i)  $\iff$  (ii)

線形写像  $f$  は、表現行列  $A$  を用いて次のように表せる

$$f(\boldsymbol{x}) = A\boldsymbol{x}$$

$f$  が単射であることの言い換えは、

$$f(\boldsymbol{x}) = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{x} = \mathbf{0}$$

であり、 $A\boldsymbol{x} = \mathbf{0}$  が自明解しか持たないことは、

$$A\boldsymbol{x} = \mathbf{0} \implies \boldsymbol{x} = \mathbf{0}$$

が成り立つということである

$f(\boldsymbol{x}) = A\boldsymbol{x}$  であるから、これらの 2 つの条件は同値である ■

(ii)  $\iff$  (iii)

斉次形の方程式  $A\boldsymbol{x} = \mathbf{0}$  に自明解しか存在しないことと


$$\text{rank}(A) = n$$

と同値であることは以前証明済み ■

i は抽象的な概念、ii は方程式論的な言葉、iii は数値的な条件であり、これらは同値な言い換えである



単射性と対比して、全射性の理解も表現行列の言葉で整理する

 線形写像の全射性と表現行列 線形写像  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  の表現行列を  $A$  とするとき、次はすべて同値

- i.  $f$  は全射
- ii. 任意の  $\boldsymbol{b} \in \mathbb{R}^m$  に対して、 $A\boldsymbol{x} = \boldsymbol{b}$  には解が存在する
- iii.  $\text{rank}(A) = m$

 証明

(i)  $\iff$  (ii)

線形写像  $f$  は、表現行列  $A$  を用いて次のように表せる

$$f(\boldsymbol{x}) = A\boldsymbol{x}$$

$f$  が全射であることの言い換えは、

$$\forall \boldsymbol{b} \in \mathbb{R}^m, \exists \boldsymbol{x} \in \mathbb{R}^n, f(\boldsymbol{x}) = \boldsymbol{b}$$

であり、これは

$$\forall \mathbf{b} \in \mathbb{R}^m, A\mathbf{x} = \mathbf{b} \text{ に解が存在する}$$

と同値である

よって、これらの 2 つの条件は同値である ■

$$(ii) \iff (iii)$$

$\text{rank}(A) = m$  が、次の条件

$$\forall \mathbf{b} \in \mathbb{R}^m, A\mathbf{x} = \mathbf{b} \text{ の解が存在する}$$

ことと同値であることは、以前証明済み ■



## 像空間と全射性

線形写像  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  の全射性は、 $\mathbb{R}^m$  の部分集合である像空間  $\text{Im}(f)$  と関係している

ref: 行列と行列式の基礎 p68~69

全射な写像は、定義域の元の像で値域を「埋め尽くす」

ということから、 $f$  が全射であることは、 $\text{Im}(f) = \mathbb{R}^m$  と同値だとわかる




## 核空間と単射性

線形写像  $f$  が単射であることは、次の条件と同値であった

$$f(\mathbf{v}) = \mathbf{0} \implies \mathbf{v} = \mathbf{0}$$

この条件は、次のように言い換えることができる

$$\text{Ker}(f) = \{\mathbf{0}\}$$

 線形写像の単射性と核の関係  $f$  を線形写像とすると、

$$f \text{ が単射} \iff \text{Ker}(f) = \{0\}$$

 証明

$\text{Ker}(f)$  の定義は

$$\text{Ker}(f) = \{v \in V \mid f(v) = 0\}$$

これを踏まえて、次の 2 つが同値であることを示す

i.  $f(v) = 0 \implies v = 0$

ii.  $\text{Ker}(f) = \{0\}$

(i)  $\implies$  (ii)

このとき、 $f(v) = 0$  が  $v = 0$  を意味するので、 $\text{Ker}(f)$  の元は零ベクトルのみになる

よって、 $\text{Ker}(f) = \{0\}$  が成り立つ ■

(ii)  $\implies$  (i)

$\text{Ker}(f) = \{0\}$  であれば、 $\text{Ker}(f)$  の元は零ベクトルのみである

よって、 $f(v) = 0$  が成り立つとき、 $v = 0$  が成り立つことになる

すなわち、 $f(v) = 0 \implies v = 0$  が成り立つ ■





# 核空間と解空間

線形写像  $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}^m$  の表現行列を  $A$  とするとき、

$$\text{Ker}(f) = \{\boldsymbol{v} \in \mathbb{R}^n \mid A\boldsymbol{v} = \mathbf{0}\}$$

と定めると、 $f(\boldsymbol{v}) = A\boldsymbol{v}$  という関係から、 $\text{Ker}(f)$  と  $\text{Ker}(A)$  は同じものを指す

これは、斉次形の連立線形方程式  $A\boldsymbol{x} = \mathbf{0}$  の解空間そのものである

$\text{Ker}(A)$  の元は、 $A\boldsymbol{x} = \mathbf{0}$  の基本解を使ってパラメータ表示できる

.....

## Zebra Notes

Type	Number
todo	1